日本百名山
登山日記

歩みを止めなければ、いずれ頂に辿り着く、そんな山日記です

vol.25 仙丈ケ岳（日本百名山 28/100）

南アルプスの女王と呼ばれる仙丈ケ岳（標高 3,033m）、気品に満ちた山容は非常に美しく、また壮大なカールは人気の百名山となっています。

山岳随筆 日本百名山の著書 深田久弥 氏も仙丈ケ岳についてこのように記しています。

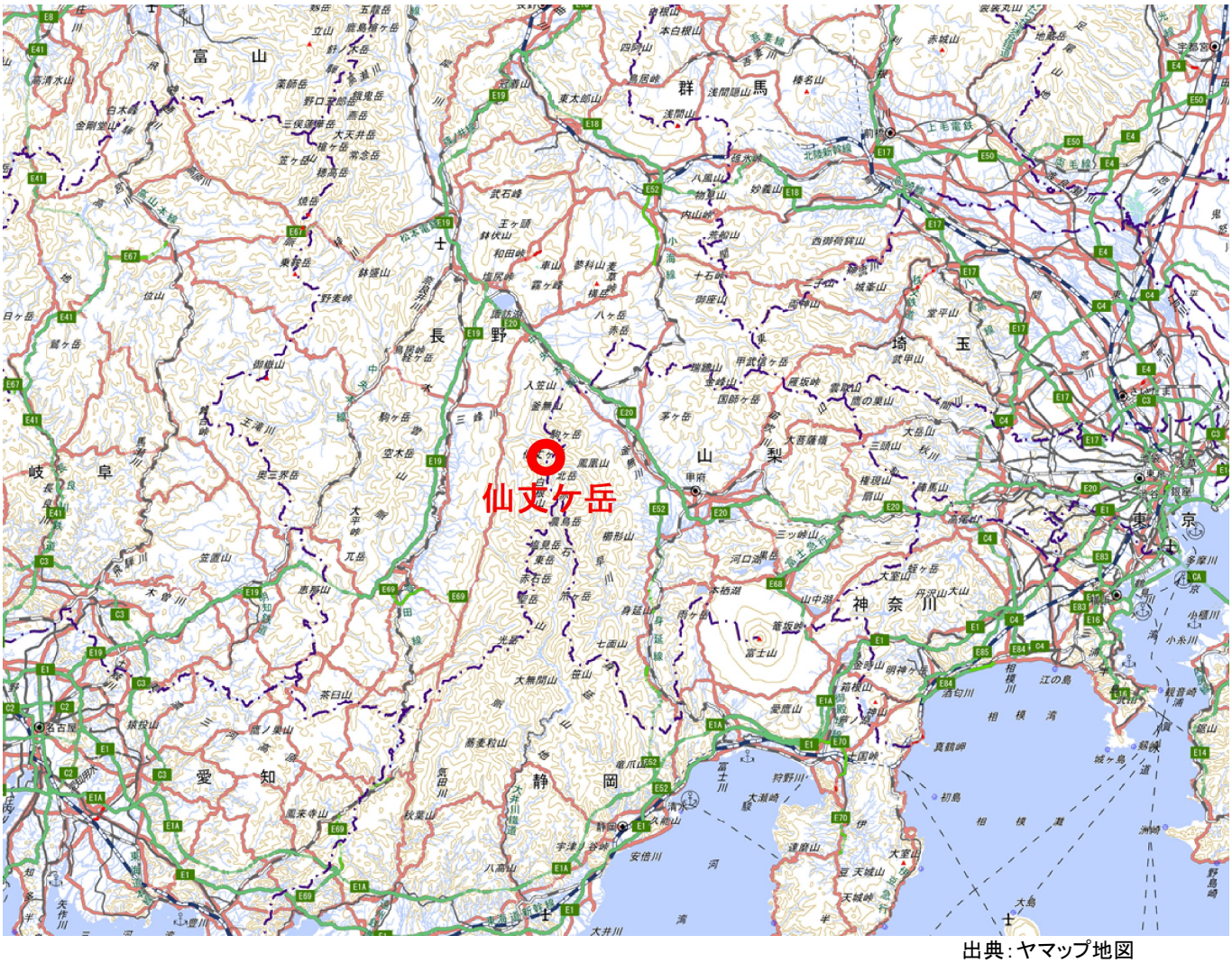
「私の好みで、日本アルプスで好きな山は北では鹿島槍、南では仙丈である。何よりその姿が良い。単純なピラミッドでもなければ鈍重な容量でもない。その姿に軽薄や遅鈍のないところが好きなのである。スッキリとして品がある。ちょっと見ては気づかないが、しばし眺めているうちに、次第にそのよさがわかってくるといった山である。（原文のまま）」

さて、このように美しい仙丈ケ岳は当然ながら登山者に大人気です。先の塩見岳のコラムに南アルプスは北アルプスに比べてアクセスが悪く、また樹林帯が多いため登山者がそこまで多くないと書きましたが、この仙丈ケ岳や甲斐駒ヶ岳は別です。その理由は、登山口までのアクセスが非常に良い事、登山行程が短く初心者でも比較的楽に3,000m峰の頂きに立てるからです。

しかしながら、私にはこの山に行きたくても行かない理由がありました。それは、先のコラムにも書いた大人の事情で、登山口のある北沢峠までは登山バスでしか行かれないということです。

小仙丈ヶ岳（標高 2,864m）から見る仙丈ケ岳と小仙丈沢カール

実は、このバスに乗るのが大変で、シーズンには10台程度のバスがフル稼働しても追いつかないぐらいの登山客が押し寄せ、バス乗り場には順番取りの為の置きザック、切符を買う為の大行列など、私にとって山に登るよりもハードルが高いミッションが待っていました。
という事で、当初は麓からのロングコースを歩こうかとも思っていましたが、11月の初旬のある日、天候の安定した日が続いていたので何気なく仙丈ケ岳を調べていると、まだ雪はさほど積もっていないことを確認、しかしながら、山小屋が冬季休業に入っており登山客は激減、バスの運行も11月15日まで（前年は11月5日に雪のため運行終了）とギリギリのタイミング、運行会社に連絡してみると、ほぼ並ぶ事無くバスに乗れるとの事なので、このチャンスを逃すまいと急遽、予定を変更し仙丈ケ岳に向かうことにしました（当初は、雪の影響の少ない奥秩父山系の百名山を予定していた）。



出典：ヤマップ地図

さて、仙丈ケ岳への登山ですが、先にも記したように無雪期は特に危ない箇所はなく、標準コースタイムも7時間程度と3,000m級の山としては非常に登りやすい山だと思います。山を舐めている訳では決してありませんが、当日は天候が良かったことから、私の中ではバスにさえ問題なく乗れればあとは純粋に山を楽しんで登れると考えていました。実際、登山口である北沢峠に到着後は、バスを下りた乗客が同時にスタートするため登山道は賑やかな雰囲気で、私が普段行っている深夜スタートで人にほとんど会わないソロ登山に比べると何倍も気持ちが楽でした。

以下、登山データです。

登山データ：距離 8.4km　累積標高上り 1,082m　登山区分 日帰り（ヤマップのデータを転記）

では、今回の山行について報告します。

毎回のことですが、1日目は山口県から南アルプス（今回は長野県伊那市から入山）へ車移動します。今回は南アルプスの中でもアクセスが良い場所という事もあり、のんびりと出発しても良かったのですが、17時までに仙流荘バス乗り場＆駐車場に到着してバスチケットが購入出来れば（発券日より5日間有効）、翌朝が気が楽という事もあり、朝3時に自宅を出発し、14時過ぎに到着して無事にチケットを買う事が出来ました。このとき既に、バス乗り場の椅子（マイクロバス1台の乗車定員分の番号がふってあるイスがある）には、順番取りのモノが置いてありました。

私もそれに習おうかとも思いましたが、駐車場には車もほとんど無かったことから、翌朝早くで良いだろうと見送り、車で20分先にある温泉に行き、晩ご飯（伊那谷 ソウルフードのソースカツ丼）食べて駐車場に戻りました。

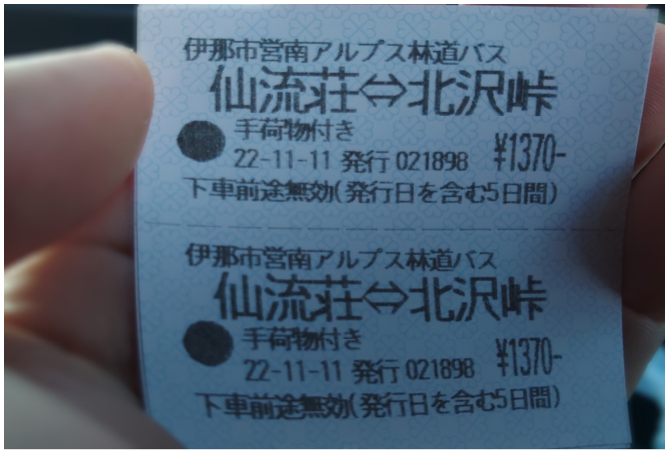
翌朝のバスの始発便は6:05ですが、登山者が集まっていれば早めに出るとの事（バス数台）でしたので、とりあえず4時起床で目覚ましをセットします。

時間は20時前、車が数台、駐車場に入ってくるのを見届けながら車中泊としました。
深夜、何度か車の音で目が覚めては寝てを繰り返し、起きたのは3時半、車を出て駐車場を見るとびっくり。目測で70-80台ぐらいの車が駐車しています。さすがにみんな寝ているようでしたが、これはまずいと思い、バス乗り場に場所取りに行きます。ザックはまだ準備出来ていなかったので、適当なものをとアイゼン（ケースに入れてある）を身代わりに置きに行きました。
順番は11番目、狙い通り1台目のバスに乗ることが出来ます。前日にバスチケットを購入していたので、一旦、車に戻り朝食にします。実はこの時点で震えるほど寒く、お湯を沸かし、大好きなカレーメシで朝食としました。
5時30分、準備を済ませてバス停に向かいます。そこで見た光景は…、前日、バスの切符を買う時にバス会社の人と話した話とは真逆、天気も良く、またバス運行の最後の週末という事もあってか予想以上の人でした（最盛期には遠く及ばないそうですが）。

目が覚めると登山者の車が多数駐車で驚き

仙流荘バス停の様子

早朝からみなさん並んでます



前日に往復のチケットを購入

私は人混みや並んだりすることが嫌いなので、正直、この山には最盛期は絶対に来ることはないと思いました。と同時に、同じようにここを出発点とする甲斐駒ヶ岳へのルートを諦めた場合、日本三大急登の黒戸尾根（標高差 約2,200m、累積標高 2,370m コースタイム上り8時間）を登る必要があることから嬉しい悩みが増えてしまいました。
さて、5時50分過ぎ、バス停に多くの人が並んでいたため、出発時刻を早めてバスは出発します。紅葉に色づく南アルプススーパー林道を走ること約50分で登山口となる北沢峠に到着です。

ここで、見た感じ約6割の人は甲斐駒ヶ岳へ、残りは仙丈ケ岳へとスタートします。
本来であれば、仙丈ケ岳を下山後、北沢峠にある山荘（こもれび荘）で一泊して翌朝に甲斐駒ヶ岳へ登るのがベストだったのですが、なかなかスケジュールが上手く行きませんでした。
まあ、甲斐駒ヶ岳へはどのルートから登るにせよ来年の話になるので、今は目の前の仙丈ケ岳を楽しみます。
先にも書きましたが、こんなにも気を楽にして山を楽しめる登山は久しぶりです。スタートしてからしばらくは樹林帯で、特にアルプス感はありません。勾配も程よく、気分よく歩けます。
最初のピークである小仙丈ケ岳の手前から急登が続くようになりますが、その頃には樹林帯を突破しており、左手にはオベリスクが眩しい日本百名山の鳳凰三山、そして真後を振り返ると男前の甲斐駒ヶ岳、またその後ろ遠方には八ヶ岳がそびえ目を楽しませてくれます。天気は快晴、気温はやや低いものの風も弱く最高の登山日和です。
ガンガンとペースを上げて登っても、帰りのバスの時間は決まっているため、意味がありません。
今日はのんびりと楽しむ登山に徹します。

バスの終点 北沢峠 ここから登山スタート

最初は樹林帯の緩やかな登山道

周囲は明るく、また他に登山者がいる山は気が楽

そこそこの勾配の上りもあり

さて、そうこうしているうちに小仙丈ケ岳に到着です。このピークからは、これから目指す仙丈ケ岳と先日降った雪が残る小仙丈カールが美しく見え、またこの山の最大の見どころである日本の標高が高い山順 ワン,ツー,スリー（富士山3,776m、北岳3,193m、間ノ岳3,190m）が揃って見える他、北アルプスや伊那谷を挟んで中央アルプス、そして眼下には紅葉の山々など素晴らしい風景に自然と頬が緩みます。

森林限界を越え、もう少しで小仙丈ケ岳

振り返ると甲斐駒ヶ岳と八ヶ岳

小仙丈ケ岳（標高2,864m）に到着

鳳凰三座、左端に地蔵岳オベリクス

さて、小仙丈ケ岳でしばしの休憩を取った後は、いよいよ仙丈ケ岳に向かいます。
ここからは多少のアップダウンや登山道に残る雪などもありましたが、心に余裕があるのんびりペースもあり、特にきつさもなく山頂に到着することが出来ました。

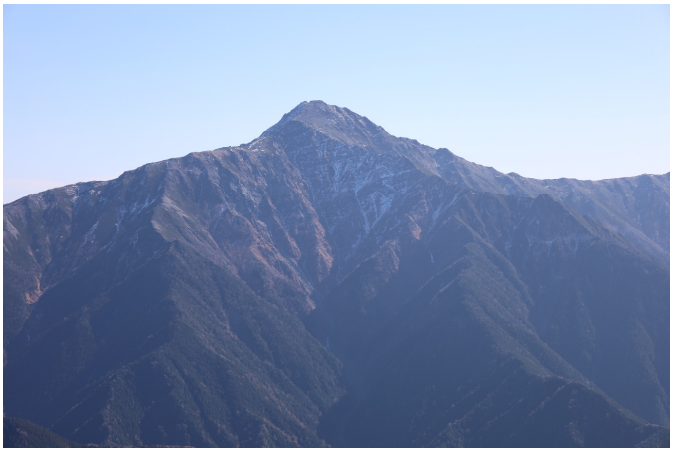
多少、雪が残る登山道

もうすぐ山頂です（右上）

山頂からの景色は先ほどの小仙丈ケ岳以上に素晴らしく、特に目を見張ったのが少し前に登った塩見岳です。ここから見た塩見岳は、やはり鉄兜には見えずとも、凛々しい山として目に映りました。
天気は申し分なかったので、山頂でのんびり食事タイムです。普段の登山では、このようにのんびりとすることはないので、新鮮な気分です。たまにはこのような登山も良いかと思いながら、食事後は周辺の山々を目に焼き付けながらのんびりと下山します。

仙丈ケ岳山頂（標高3,033m）

日本の１,２,３　左から富士山、真ん中北岳、右は間ノ岳



北岳、何度も予定したが…近いうち登ります

伊那谷を挟み中央アルプス（空木岳、木曽駒ケ岳）

遠くに北アルプス（冠雪した槍ヶ岳が見えます）

名残惜しいですが下山します

北沢峠に到着したのはバスの出発時刻の約1時間前でしたが、それから間もなく登山者がバス定員まで集まったので、臨時便が出て予定よりも早く出発しました。このバス会社の評判がすこぶる良いのは、こういった融通の利くところかもしれません。本当にありがたい。

下山後は、駐車場代（1,000円）を支払い、昨日に行った温泉で汗を流し帰路につきました。

南アルプスの女王 仙丈ケ岳。登山以外の部分で非常に疲れましたが、山自体は本当に素晴らしく、女王の名に相応しいと思いました。

今後は、まだ未踏の南アルプスの山々から眺めることになるでしょうが、またいつか、機会があれば、今度は麓から登ってみたいと思いました。